

小 学 校 教 材

地球儀とその指導

教科教育部 吉 田 伊 勢 吉

1 はじめに

近代学校教育が発足した明治5年の文部省布達において、教具として地図と共に地球儀が取りあげられている。以来、学校では、地図の原典ともいえるべき地球儀を重要な教材備品として取り入れてきたが、ともすると十分な指導は行われず、装飾的に扱われてしまったのではないと思われる。地球儀は地図と比べて取り扱いの不便であることが、その利用が進まなかった一因であろう。

宇宙時代に入り、グローバルに事象をみる機会の多くなった現在、日常生活の中に地球儀の利用は不可欠なものとなってきた。

新学習指導要領(社会)では、小学校6年の内容(3)のウに「我が国が世界の国々と貿易の上で深いつながりをもっていることを具体的事例を通して理解し、地球儀を用いて、その主な国々の位置を確認するとともに……」と示して、従来より地球儀の活用を重視している。

地球儀を社会科の学習で使う意義は、大きく分けて二つある。一つは、球体としての世界認識を育てるためであり、二つは、世界全図などの小縮尺の地図の特徴、特に表現上の限界を理解させるために、

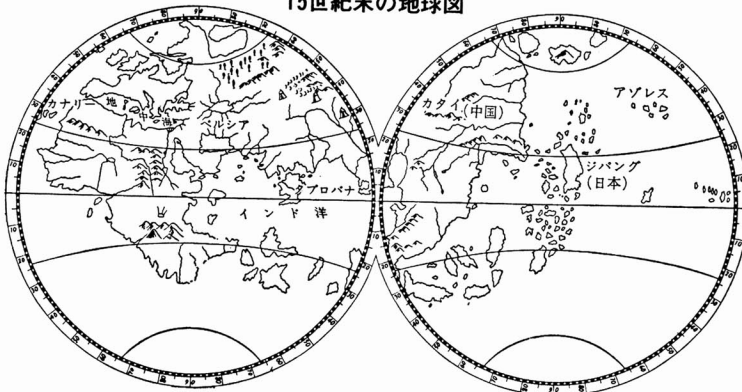
地図と地球儀を対比して考えさせることである。

2 マルチン＝ベハイムの地球儀

イタリアのナポリ博物館には、紀元前4世紀ごろに作られたと推定される直径2mの地球儀が所蔵されている。この地球儀は、ギリシャ神話に出てくる怪力無双の巨人アトラス(Atlas, 神に反抗した罰として天を支えている人の意)の肩に支えられている。1595年に出版されたメルカトルの地図帳名は、「アトラス、すなわち世界の創造と創造された世界の姿に関するコスモグラフィカの考察」とした。これが奇縁となり、地図帳のことを一般にアトラスというようになったといわれる。

作者や製作年代が明らかで、しかも現存する最も古い地球儀は、西ドイツのニュールンベルク博物館所蔵のマルチン＝ベハイム(1459～1506、ポルトガルのジョアン1世がつくった天文学研究所教授)の地球儀で、1492の銘がある。この地球儀は、直径50.7cm、経緯線ははぶかれているが、赤道、南北回帰線、南北極圏がひかれ、赤道には経度360度、リスボンから経度80度西のところの一つだけひかれた経線には、南北にそれぞれ90に分割されて目盛がつ

15世紀末の地球図



マルチン＝ベハイムが1492年につくった地球儀による地球図で、日本がジパング(Gipangu)として記されている。(文献① P254より)